

クローズアップ NGO・NPO

財団法人

北海道国際交流センター事務局長 池田 誠

民の活力！草の根国際交流で社会を変革する

■ いとしのエリーの夏 ■ ～HIFは生まれた

1979年夏、北海道七飯町の農家に16名の留学生が2週間ホームステイをしました。それは、外国人を見ることのなかった農村地帯にとって天と地がひっくり返るくらい大きな出来事でした。それが、34年の歳月を経て、北海道国際交流センター（以下、HIF）を通じて10,000名以上の参加留学生が北海道を第2のふるさととして交流を続けているという事実。開港都市としても知られる函館港を玄関口に持つ地域の血は、「ホームステイで地域を変える。無形の学園を創る」という思いの下で脈々と受け継がれているのです。民が行う国際交流の草分けとして行った活動は、今や全国に広がっています。

では、今まで活動を広げ、HIF自体を維持してきたものは何なのでしょう。それは、まさに自発的なボランティアの力、そしてどんなことがあっても国際交流の火を消さないという強い思いだといえます。事業の主なもの、2か月の日本語日本文化講座夏期セミナーと、2週間の国際交流のつどいであり、ホームステイは基本的に無償ボ



国際交流のつどい

ランティア、留学生へ教える茶道、華道あるいは書道、武道などの講師もボランティアでお願いしています。

それに地場企業と個人によって組織されている後援会からの支援や寄付がHIFの運営費を支えているのです。

■ いくつもの壁を越えて

16名から始まった国際交流のつどいは全道に広がり、毎年400名以上の留学生が集まりました。20名からスタートした日本語日本文化講座も一時、約80名の学生が集まりました。これには日本経済の高度成長と、国際交流バブルともいえる追い風があつてのものだと思われます。しかし、1995年の阪神大震災、オウム事件などで留学生が激減し、また円高によってドル建てで授業料を集めている日本語日本文化講座は大きな赤字を出したのです。その後もサースや新型インフルエンザ、東日本大震災、そして再び訪れた円高や中国、韓国の領土問題など、今も大きな影響を受けています。

HIFの年間国際事業費は約6,000万円。内訳は事業収入が5,000万、補助金300万、委託費が300万、後援会・寄付金などが400万ですが、この状況は事業収入が転べば全てを失う危うさがつきまといまいます。補助金はもう見込めない状況であり、寄付金も減りつつある中で、いかに生き延び、将来を見据えて行けるのかということを検討し、過去の事業報告と会計状況の分析を繰り返しました。その結果、事業の柱となっている国際交流のつどいと日本語日本文化講座だけではなく、いくつかの大きな柱を構築すること、そしてHIF



日本語日本文化講座夏期セミナー

への関心層を増やし、分野を越えて、地域を越えて活動することが急務と考えられたのです。

分野を越えるパワーを持って

新規国際事業への着手、今まで夏中心だった事業形態を通年型にするなど、次々と新規事業を立ち上げました。日本語日本文化講座夏期セミナーはハーバード、イエール、プリンストンなどの大学・大学院生が参加し、選考の倍率も3倍を超えました。国際交流のつどいは夏だけではなく、冬にも実施し、農業体験に特化したプログラムを実施するなど、留学生の希望にも対応していきました。また、ホストファミリーがさまざまな国の人たちを受け入れ、北海道を好きになってもらえるように、積極的にJICA青年研修や内閣府青年交流事業等を行ったのです。

2003年頃からはさらに改革を進め、以前はニュースレター形式だったHIF会報誌を地域のNPO/NGO情報誌「ボラット」へ転換し、国際交流だけではなく、環境、福祉、農業、教育などさまざまな分野に関心のある人たちへ情報発信を行いました。また海外ボランティアの環境保全ワークキャンプ、大学連携コンソーシアムの国際観光論を企画するなどさまざまな分野へ関わるようになったのです。そして、2010年には、国際交流団体としては初めて厚生労働省の地域若者サポートステーション事業を受託し、海外の多様な価値観を持つ人たちと、殻に閉じこもりがちな若者の接点の場をつくることができました。現在は

それに伴い、若者の活動の場として農業、ものづくり分野とのつながりも広がっています。かつて、国境という壁をホームステイという家庭交流で壊してきたように、縦割り社会における分野の壁を壊してゆくことこそHIFの使命と考え、活動しています。

これからの時代を切り拓く

少子高齢化の時代に入った日本に忍び寄る若者の労働力不足。それを補うためにも外国人労働者の力が必要であり、多文化共生社会への備えが大切になっています。また、世界の難民の第三国定住についても議論を重ね、環境分野でも地域のラムサール条約登録に関して力を注いで来ました。HIFは自由な空気、おおらかな人間性、継続する忍耐強さという北海道の恵みの中で、ボランティア活動と、行政、企業とをしっかりと結びつけるように活動しています。縦割りでも、横並びでもないボランティアから生まれる自発的なエネルギー、これこそが現在の閉塞した社会を切り開く力であり、その力を常に醸成しながら進んでゆくことこそ民間団体の生き抜く道と信じています。これからNPO/NGOでのプロを育て、ボランティア人材を育成していくことは、北海道を舞台とした活動の中でこれからの時代の本質となる事柄であると信じています。全国の活動グループ、世界の地域との連携も視野に入れて今後の時代を考えながら、新しいHIFを創っていきたいと思います。



大沼国際ワークキャンプ